

初夢の山（白馬岳・主稜）

2006年元旦

最後の胸を突くような急峻な雪壁に打ったスノーバーに身を預けて、頭上に覆い被さっている雪庇を切った。身を仰け反らしてピッケルを振っていると、足下には昨日出発した遥か下方の白馬尻のデブリの底まで白い空間が繋がっているだけで、その他には何も無い。40m下でパンチョが確保して呉れてはいるが、途中の軟雪に打った支点はいつ破壊されてもおかしくない代物で、背筋に滑落の恐怖が走った。しかし、こうなったらもう上に進むしかない。どうにでもなれ！！

白馬岳の国境稜線を越えて来る真冬の季節風が作った巨大な雪庇はピッケルで切れるような代物ではなかった。窮屈な姿勢でザックからスノーソーとスノーショベルを取り出し、雪庇の薄い部分を選んで人がやっと這い登れるトンネルを掘った。トンネルの開通に2時間を要した。トンネル掘削で腕がパンプして短いトンネルを抜けるのに更に1時間を要した。もう心身ともヘトヘトで死ぬかと思った。

トンネルからほうほうの態で這い出した直ぐ目の前に白馬岳頂上の方位表示盤が風雪の中にぼんやりと浮かんでいた。やっと頂上に辿りついた！！

アヘア、やっと終わった。助かった。頭も体も100%麻痺した老体に鞭打って、半分腰が抜けた態で表示盤にアンカーをセットして、フォローするパンチョを確保する。手が極寒で痺れていてザイルを上手く握れない。今、奴に落ちられたら御名御璽。野郎何をマゴっているのだ！！ザイルにテンションが掛かり放なしで、さっぱりザイルが手繰り寄せられないではないか。無理も無いナ、後で聞いたら、小生のようなスリムな身体はトンネルを抜けられたが、脂肪が腹回りに詰まって恰幅が良くなっている彼は、腹が穴に詰まってニッチモサッチモいかなかったらしい。モグラの鼻だけを穴から突き出してフーフー言っている彼を穴から引きずり出して、凍えた手で握手。涙目になってきた。

ご苦労さん！アングトよ。風雪荒ぶ中で3時間もジーツと確保姿勢をとって動けなかった野郎はさぞ寒かったろうナ。その上、雪庇を切った雪が容赦なく頭上から襲いかかったことであろう。なあ、パンチョ！サア終わったゾ！何処かに雪洞でも掘って熱燗でイッパイやろうヤ。

以上は厳冬期の白馬岳・主稜登攀の最終部分、雪庇を抜けて頂上に這い上がった時の情景である。このルートは大分前から我々の頭の中にあった。数年前の春に白馬杓子岳の双子尾根を登った時も、このルートを観察しておいた。白馬岳の頂上から見下ろした主稜の落ち口は、足下も見えないくらい奈落の底に切れ落ちていて、二人で震え上がったものであった。

このルートは雪が安定し陽射しも長くなる4月中旬以降がベストシーズンとされている。それ以前は悪天候や雪崩の危険が大きく、入山するクライマーはいない。初登は70年以上も前の1931年であるが、この時も3月31日であった。マ、暇人の我々にとっては、人がいない時期がベストシーズンであるので、今年のルート初登を目指して、厳冬期の2月末を選んだ。大体が正月明けからゴールデンウィーク迄はこの地域は死の季節で、まして2月に主稜を登るなどという行為は自殺行為以上のものであると関係者は指摘している。もっともなことである。

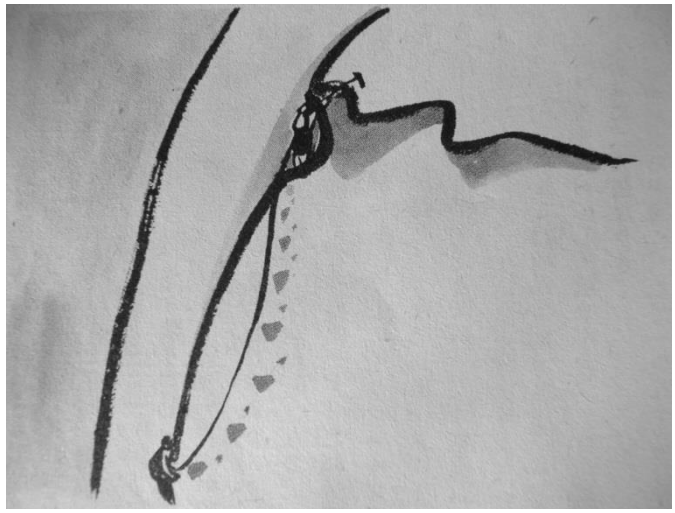
白馬岳・主稜というのは、白馬岳頂上から一気に1400mほど直接白馬尻に切れ落ちている急峻な尾根であり、夏にオバハン集団登山で賑わう大雪溪の直ぐ右の岩稜である。夏にはヤブに覆われていて登攀の対象にはならないが、雪を被れば、日本を代表する雪稜ルートとなる。

現在でこそゴールデンウィーク頃の残雪期の登攀は、北アルプス中級バリエーションルートとして多くのクライマーを迎えており、ソコソコのオバハンでも優秀なガイドに引率されれば容易に引っ張り上げて貰えるような高速道路になっているが、黎明期の頃は相当の難物であったことだろう。上記初登は3年間にわたる綿密な偵察行を経て、現場での6日間の天候待ちの末に成し遂げられた（神戸商大OB 2氏による）。この主稜の山容を画家でありクライマーでもあった上田哲農はその著書『日翳の山 ひな

たの山』の中の「ある登攀」という章で次のように記している。

「・・・こいつはもっとのびやかに育つ運命を自然の過酷な取り扱いによって、千メートルの垂直距離の間に、その長大な肉体を無理やりに押しこめられ、歪められ、右、あるいは左にたたまれて、憤怒の極に達したという不敵な面魂をもっている・・・」。

(上田哲農：同章挿絵、拙稿冒頭の雪底部分⇒)



ま、余談はさておき、我々の登攀記に戻ろう。

GWの頃からは猿倉まで開通するバスも厳冬期には、細野部落止まりである。(細野部落は、現在は「八方」という名称になっている。「白馬」が「ハクバ」と地名改悪になったのと同様に、八方尾根スキー場が長野オリンピックのスキー競技場となったのに合わせて改悪されたと思われる。実に安直な地名変更で怪しからん)。細野から2時間ばかり歩いて猿倉に至り、更に5時間ほどラッセルに苦しんでやっと白馬尻の台地の上にスノーマウンドを作って露営。雪が締まっている春ならば2時間程で到達できる距離である。入山初日の恒例行事トンチャン(ホルモン焼き)宴会を始める。外気は相当に気温が下がっていて、ジャンジャン体内燃料を焚いても寒くて堪らない。

白馬尻は、杓子岳、白馬岳、小蓮華山などの後立山北部の国境稜線が扇形をなして広がる扇の要に相当する漏斗のような地形で、従って雪崩の巣となっている。慎重に大雪渓を渡り主稜末端の斜面に取り付く。幸いここ数日はさしたる降雪も無かったようで、ハンドテストで弱層をチェックをしてみても雪層は安定しているように思われた。しかし、この主稜の末端ピークである第8峰の頂上まで登り切らないと雪崩の危険は去らないから、ウンウン言いながらラッセルに励む。還暦をいくつも過ぎてご苦労なことではあった。幸い天候も上々だ。

主稜はここから白馬頂上直下まで極端に痩せたナイフリッジと胸を突くような雪壁が屈曲する美しい稜線となった。左側には端正な杓子岳が真っ白な姿を見せている。ここからアンザイレン。暫くはコンテで進む。痩せたナイフリッジではスタカットに切り替えるが、スノーバーを打っても手ごたえがなく安心できない。足元から雪が崩れてズルズルと滑る。スタンディング・アックス・ビレーをしようにもピッケルを差し込むに足る雪層がない。このような場所では、トップの滑落を停止させるためにはビレーヤーが反対側の斜面に飛び込むしかない。足下は切り立った奈落の底。心ノ臓が止まりそうだ。

GWの頃になれば雪も締まってきて、このルートは通常は1日で登り切るのであるが、雪も深くトレースも全く無い厳冬期には、とても1日では登り切れない。我々は荷を軽くするために天幕は割愛し、泊まりは雪洞とした。暗くならない内にと、5峰手前の適当な斜面に穴を掘った。外が如何に風雪であっても、雪洞の中は天国である。ローソクの炎が雪の壁にキラキラと反射して白亜の御殿である。またまたホルモン宴会に励んだ。

翌朝は天候が余り良くない。雪穴から這い出してみたら、かなりの風雪であった。このような気象下では行動しないのが原則であるから、また穴に潜って時間をうちやる。

(6峰から主稜上半部を望む。最上部の黒いピラミッドが2峰⇒)



そのうち少し明るくなってきて風も多少は収まってきた。頂上辺りは霧の中で様子は見えないが、出発
といったそう。5峰から上がこのルートの中核部となる。ナイフリッジも極端に痩せてきた。右側の白馬
沢側はすっぽりと切れ込んでいて足が震える。
2峰の岩場が黒々と見え出した。ここは右手
の白馬沢側の雪壁と、正面の岩場を登るのと
二通りのルートが取れるが、雪壁はもうウン
ザリだから、岩場を登った。緩んでいた残置
ハーケンを叩き込んでランナーとした。2峰
を越えたコルの頭上には冒頭の急峻な雪壁が
頂上まで70m続き、最後が雪庇となってオー
バーハングとなっているのであった。ここ
からは冒頭に書いたとおりである。



(3峰から主稜を振り返る)

白馬山頂からの展望は360度であるが、
景色を楽しむ余裕は残っていなかった。

ヨタヨタと頂上小屋まで下り、屋根の下吹き溜まりに再び雪洞を掘って潜り込んだ。やっと終わった。
お互いの顔をツラツラ眺めて観るに、頬や耳が凍傷で赤黒くくすんでいた。下山は、雪崩の巣である大
雪渓は使えないので、再び白馬岳頂上に登り返し小蓮華山から白馬大池を通り、梅池から信濃四谷駅(こ
れも現在は「白馬駅」と改悪されている)に出て駅前のヤキトリ屋で反省会を行ってこの山行を終った。

というところで、夢から覚めた。明けて2006年元旦。この夢が現になるのか幻で消えるのか、近
い将来に是非実現したいものである。パンチョ君、よろしくお願いします。(2006年1月1日記)

(写真は、山と溪谷社『日本のクラシックルート』より引用)

(本稿 完)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)